

ブルシャスキー語の文法書について

吉 岡 乾

Reference Grammars on Burushaski

YOSHIOKA, Noboru

Keywords: Burushaski, reference grammar, descriptive linguistics

キーワード: ブルシャスキー語, 参照文法, 記述言語学

1. ブルシャスキー語・概説
2. 文法書・スケッチ一覧
3. 記述上の諸問題

1. ブルシャスキー語・概説

ブルシャスキー語は、パキスタン北部やインド北西部を中心に話されている、系統的孤立語 (language isolate) である (図1)。話者の中核をなしている民族はブルシヨ人と呼ばれる人々であり、話者人口は概算で10万人に上る。一般に使用されている文字はない。



図1 南アジアの中での位置

吉岡乾. 2022. 「ブルシャスキー語の文法書について」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 183-199. DOI: <https://doi.org/10.15026/116965>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

1.1. 地理・方言

その主な分布地域は3つの飛び地で構成されている（図2）。



図2 ブルシャスキー語の分布図

その1箇所めは、パキスタンのギルギット・バルティスタン州(旧 北部地域)ギズル県のヤサイン谷（図3、左）であり、ブルシャスキー語の分布の中では最も西に位置している。

2箇所めは、その東に直線距離で100-150kmほど離れた位置でフンザ川を挟んで向かい合っている同州フンザ県フンザ谷とナゲル県ナゲル谷、並びに、フンザ谷上流に位置するゴジャール谷（図3、右）であり、3つの飛び地の中で最も話者人口、地域内での話者率の高い地域になっている。

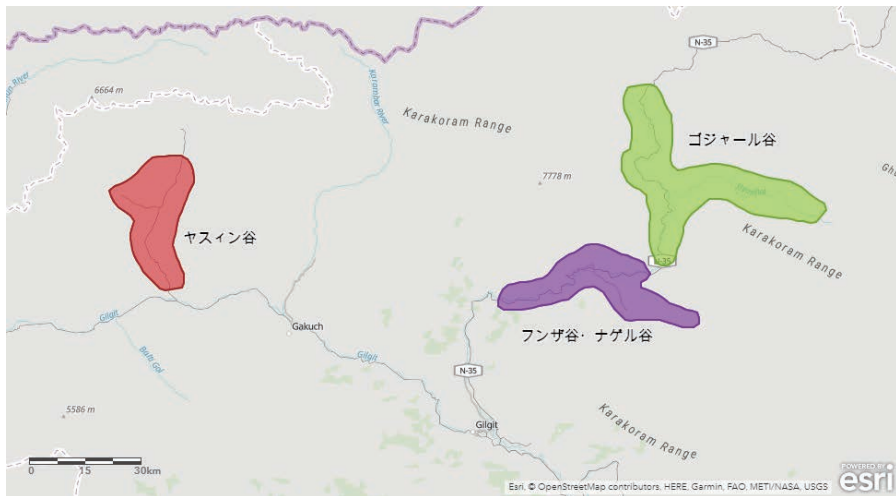


図3 パキスタン北部のブルシャスキー語が話されている谷

3箇所めはインドのジャンムー・カシミール州スリナガル市の中央東にあるダル湖の西、ハリ・

パルバト城の東の麓に位置する、ボタ・ラージ地区（図4）である。ここは19世紀後半に移民したブルショ人（バルティ人も含む）の居住区であり、他にもスリナガル市郊外などに同民族は住んでいるものの、それらの地区の中で一番、言語保存度が高いであろうと考えられる場所である。ボタ・ラージ地区のブルシャスキー語話者は2017年現在で、400-500人ほどである。



図4 スリナガル市の中のボタ・ラージ地区の位置

次に示している図5は、筆者による、2019年までの現地調査に基づいての、暫定的なブルシャスキー語の方言分類である。調査した限りでの分類であるため、地域によって疎密差がある上、他の研究との間の照合を行っていないものであることも念頭に置いた上で参照されたい。東西で言語的に大きな隔たりがあることから、ここでは、ヤスィン（とその周辺）の方言を「西ブルシャスキー語」、それ以外の方言をまとめて「東ブルシャスキー語」と呼んでいる。参考までに、Backstrom (1992: 40) によると、その東西間の基礎語彙共通度は70%程度であり、東ブルシャスキー語内でのフンザ・ナゲル間の共通度は95%程度と算出されている。

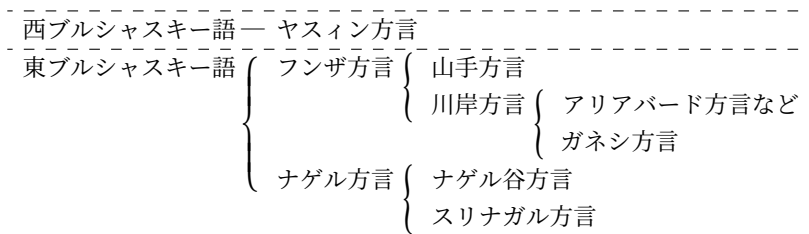


図5 ブルシャスキー語の方言

但し、図5ではすっぱりと切り分けてはいるが、フンザ谷で話されているガネシ方言は、フンザ方言の中では最もナゲル方言的な特徴が強い。これはガネシ村が、フンザ谷とナゲル谷とを結ぶ主要な道路の関所的な位置にあり、ナゲル谷との接点であるためであると考えられる。一方でスリナガル方言は、フンザ方言的な特徴も有している。19世紀後半のこの地区への移民の内訳は、ナゲル谷出身のブルシャスキー語話者が最も多く、次にスカルドゥ周辺のバルティ人（バルティ語話者）、それに次いでフンザ谷のブルシャスキー語話者、という比率だったらしい。そのために、スリナガル方言はナゲル方言がベースになっているのだと考えられる。

1.2. 文法概要

ブルシャスキー語は膠着性の強い言語で、接尾辞と接頭辞とを用いる。数の上では接尾辞が多いものの、周辺言語で接頭辞が用いられることが殆どない¹のと比べて、圧倒的に多くの接頭辞を用いている²。語順は基本的にSV/AOVで、主要部後置型の pro-drop 言語である。格関係が接尾辞で示され、語順の自由度は高い。周辺言語との目立った異なりとして、名詞クラスが大きく4つに分かれることも挙げられる：ヒト男性、ヒト女性、具象物、抽象物。

音韻的にはインド的特徴である無気・有気の対立（但し無声子音のみ）や反舌音系列があり、周辺の音素として鼻母音も見受けられる。音節構造はCVCを基本としていて、語頭音節オンセットでのCr-や語末音節コーダでの-CCという子音クラスタもあるが、数も種類も少ない。（弁別的）アクセントはピッチ型で、高いか高くないかの2段階しかない。基本的には1単語に1つだけ高ピッチアクセントが落ちる。

ブルシャスキー語の形容詞類（数詞を含む）は名詞に近い振る舞いをし、品詞を大きく分けると格接尾辞を取れる名詞類、人称接尾辞を取れる動詞類、どちらも取れない不変化詞類の3つに分けられる。コピュラと動詞は異なった活用をする。連用修飾をする「副詞」を独自に立てる必要性はない。

語形成は接辞法によるものが多く、複合や重複などは少ない。但し、オノマトペ形成やいわゆる「反響語（echo word）」形成には部分重複（変形重複）が多用される。名詞類の形成には専ら接尾辞が用いられるが、動詞類（や多様な動詞語幹）の形成には接尾辞と同程度に、接頭辞も用いられる。

格配列としては能格言語であり、意味上の時間性（未来 vs 非未来）と人称とで部分的に分裂している。接尾辞によって形式上で区別される格の数が多く、一次格として絶対格（ゼロ）、能格、属格、与格、奪格、二次格として10個以上の場所格がある。

動詞の形式はムードを取る文末用の形式と、脱動派生される「分詞」類とに分けられる。一括りにした「分詞」の中にも、連体修飾用の形式、接連結用の形式、準体的に用いられる形式などがあり、名詞類的屈折をするものも不変化のものもある。

¹ 最短でも西に直線距離で180kmほど離れたカティ語（印欧語族インド・イラン語派ヌーリスタン語派）には、化石的な場所格標識 *p-* がある。

² その所為もあってか、3,000km以上北に離れたケット語（接頭辞使用が同等に多い能格言語）や、否定接頭辞 *a-* などを持つサンスクリットなどとの系統関係が度々唱えられて来ている。

2. 文法書・スケッチ一覧

以下に示すのは、文法書・文法スケッチとして書かれたと理解できる文献のリストである。必ずしも参照文法書とは呼べないものもあるが、ここでは「音韻と（一定量以上の）文法の記述があるもの」を判断基準にしている。そのため、現地で無批判にありがたがられている人物の著書であっても、散発的な文法事項を乱雑に並べ連ねただけのものなどは、結果として除外されていることを断っておく。特に、研究書として重要と思われるものに関しては、太字にして示す。

2.1. 東ブルシャスキー語

東ブルシャスキー語のほうが、西ブルシャスキー語よりも研究は長く、多い。それは、東のほうが方言変種が多いからというだけでなく、少なくとも近年の社会状況で考えれば、環境として調査がし易いか否かという点も研究量の差として現れているためではないだろうか。

- **Lorimer, D. L. R. 1935–38. *The Burushaski Language. vol.I: Introduction and Grammar (1935a); vol.II: Texts and Translations (1935b); vol.III: Vocabularies and Index (1938). Oslo: H. Aschehoug & Co. (W. Nygaard).***

ブルシャスキー語の文法書としては最初のもの。3巻本。音素を立てず、音声表記での記録となっている。これを縄田(1992)³は誤って音素表記と読んだため、そこでは音韻の非常に複雑な言語に見える。フンザ方言を中心に記録しており、ヤスィン方言も巻末に章を割いて多少触れている。

- **Klimov, G. A. i D. I. Edel'man. 1970. *Jazyk Burushaski (Язык Буршаски)*. Moskva: Izdatel'stvo «Nauka».**
活格型言語類型で有名な Klimov と、ヌーリストン語派の研究で有名な Edel'man との共著による、東洋学研究所の文法ブックレットシリーズの1冊。音素が立てられる。語彙集なし。恐らくフンザ方言。

- **Berger, Hermann. 1998. *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager. Teil I: Grammatik (1998a); Teil II: Texte mit Übersetzungen (1998b); Teil III: Wörterbuch (1998c)*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.**

3巻本。記述の精度・分量の上で、ブルシャスキー語の文法書の中では最も良い。但し、押し並べて段落番号を付けた地の文で説明して行くスタイルなので、章の中の構成が極めて分かり辛い。例文も地の文に収まっていて、グロスはない。フンザ方言とナゲル方言の両方を見ている。

- **Munshi, Sadaf. 2006. “Jammu and Kashmir Burushaski: Language, Language Contact, and Change”. Unpublished Ph.D. dissertation, The University of Texas, Austin.**
スリナガル出身でカシミール語を母語とする、アメリカで教育を受けた研究者によるスリ

³ 縄田(1992)は実質的に、Lorimer(1935a)の要約である。

ナガル方言の記述。全体として社会言語学に関心が強いのか、文法記述としては不十分な部分が間々見受けられる。グロスあり。語彙集なし。

- Yoshioka, Noboru. 2012. “A Reference Grammar of Eastern Burushaski”. Unpublished Ph.D. dissertation, Tokyo University of Foreign Studies.
筆者の博士論文。フンザ方言を中心にしている、ナゲル方言は副次的に触れている。英語の質にかなり難がある。
- Yoshioka, Noboru. 2015. “Hunza Burushaski”. In Toshihide Nakayama, Noboru Yoshioka, and Kosei Otsuka, eds.. *Grammatical Sketches from the Field 2*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. pp.143–178.
筆者によるフンザ方言の文法スケッチ。実際に書いたのは博論よりも前。
- Munshi, Sadaf. 2019. *Srinagar Burushaski: A Descriptive and Comparative Account with Analyzed Texts*. Leiden, Boston: BRILL.
スリナガル方言の文法記述。Munshi (2006)と比較して、社会言語学偏重は薄れた。グロスあり。アクセント表記なし。物語テキスト2篇、対話1篇あり。語彙集なし。

2.2. 西ブルシャスキー語

西ブルシャスキー語の研究は、言ってしまうと最初の1本しかない。筆者も調査にまだ2度しか行けていない（2007年、2019年）。

- Berger, Hermann. 1974. *Das Yasin-Burushaski (Werchikwar)*. *Grammatik, Texte, Wörterbuch*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
西ブルシャスキー語の唯一と言える文法書。上述のBerger (1998)と同じく、押し並べて段落番号を付けた地の文で説明して行くスタイル。文法パートは正味、50ページのみ。音素を立てている。グロスはない。語彙集あり。
- Grune, Dick. 1998. *Burushaski. An Extraordinary Language in the Karakoram Mountains*. Pontypridd, Wales: Joseph Biddulph Publisher.
先行研究のポイントをまとめたようなブックレット。デネ・カフカス大語族理論にブルシャスキー語を含めたい様子が窺える。一方で、バスク語との関係をもほのめかしている。
- Tiffou, Étienne. 1999. *Parlons bourouchaski. État présent sur la culture et la langue des Bourouchos (Pakistan)*. Paris: L'Harmattan.
語学書の中に文法スケッチがある。基本は西ブルシャスキー語で、少しだけフンザ方言に関する記述もある。テキストにグロス（逐語訳）あり。語彙集あり。この著書に限らず筆者は「受動文」があると訴えているが、現地（東・西双方）では一切確認できていない⁴。

⁴ 挙げられている例文は非文と判断された。なお、東西ブルシャスキー語ネイティブ達はいずれも、ウルドゥー語でも受動表現を使わないし、人によっては非文と判断して来る。

(⇒§3.3.2)

- Shafi, Muhammad Wazir. 2006. Brōshāskī Razōn: A Book on Brōshāskī Grammar (In Yasin Dialect). Karachi: University of Karachi.

パキスタンのカラチ大学で教育を受けたであろうネイティヴ⁵による、ヤシン方言の記述。無理に専門用語をブルシャスキー語で付けようとしている箇所もある。ただし解説はほとんどなく、説明のない語形一覧表の羅列が続く。グロスなし。語彙集(?)あり。

3. 記述上の諸問題

本章では、各文法書を見比べる中での目立った問題点を洗い出してみる。便宜的に、ざっくりと音声・音韻周り、形態論周り、統語も関わるもの、付属語彙集で分けてみたが、ここで扱いたい問題は、ひとまず、全部で7つである。

3.1. 音声・音韻論, 表記

3.1.1. 謎の音素 *y*

東ブルシャスキー語の音素として、Lorimer 以来、慣習的に *y* で表記されている音がある。これは「【先に研究を進めた】シナー語とも共通しておらず、ブルシャスキー語以外で出会ったことがない」(Lorimer 1935a: 6)⁶と記述される音であり⁷, Lorimer は「暫定的にこれを『反り舌の *y* (cerebral *y*)』だと見做す」(*ibid.*)と記録した。

Klimov i Edel'man (1970) はフンザ川上流で話されているイラン語派のワヒー語にある音と比定して、この音を *ÿ* と表記したが、音価について詳しくは述べず、但し通時的にインド・ヨーロッパの反り舌破裂音が **ɣ̥* を経て今の音になったのではないかという推測をしている。要するに、よく分からない。ワヒー語の記述で普通 *ÿ* と書かれるのは [y] である (*y* と書くのは [ɣ])。

Berger (1998a: 22) では、「*y* はブルシャスキー語特有の摩擦音である。反り舌の歯擦音と硬口蓋-舌背面との同時調音であり、言い換えれば *ɟ* [ʃ] とドイツ語の Ich 音 [ç] との同時調音である」とされている。ブルシャスキー語の音韻・形態に関する通時的な変遷を扱った Berger (2008) で新しいことが述べられているかとも期待したが、結局、西ブルシャスキー語にはない、形態音韻論的に脱落が多いといった、ちよとした観察で直ぐに分かることや、Klimov i Edel'man (1970) で挙げられていた古いインド・アーリヤ語との対応関係のようなものを少し挙げているのみであった⁸。

Tiffou (1999: 120) もやはり、「/y/ は世界の他の言語には全く見られない音である。もしかしたら全く違う音の異音かも知れない。厳密に書き表すのは難しい。湿音性が高く聞こえる (Le son

⁵ 後に登場するブルシャスキー語調査アカデミー(Burushaski Research Academy)なる組織も、カラチ大学に付設という形で存在している。中心人物は、(ころころ名前を変えているのだが) Nasir ud-Din Nasir Hunzai 氏。Shafi 氏の来歴は不明だが、恐らくそのアカデミーのお膝元から出て来ていると見て良いだろう。

⁶ 以下、本稿内での、日本語以外で記述された研究の和訳は、全て筆者による。

⁷ 隣接するドマーキ語(印欧語族インド・イラン語派インド語派中央インドグループ)でもこの音の使用があるが、ブルシャスキー語からの借用語に限られるかも知れない。但し、Lorimer (1939: 23) も指摘するように、必ずしも今のブルシャスキー語で対応する語がない単語にも含まれている。なお、シナー語は、インド語派北西インドグループ。

⁸ なお、Hermann Berger は2005年に亡くなっているため、氏の新しい研究が今後これ以上出て来ることはまずない。

donne une impression de mouillure) けど、反り舌調音の独特の響きも有している」と、分析を手放している。

Munshi (2006, 2019) や Čašule (2010) といった一部の研究者は、この音を反り舌接近音の ɟ としているが、明らかにウルドゥー語などのその音とは異なっているし、借用の際にウルドゥー語の ɟ が一律、q に置き換えられてしまっている事実とも話が巧く合わない。

実際に現地で発音を観察すると、舌尖は下前歯の後に置かれたままで、舌の後ろの方が盛り上がっている。Yoshioka (2012) など筆者は、この音を ɟ̠ として記述してきている。但し一方で、形態音韻論上の振る舞いとしては、確実に反り舌の素性を持っているため、表記の上では他の反り舌音 (t, tʰ, d, ɟ, ɟ̠, ɟ̡) と共通させて下点を持たせた、y 表記を継承して用いている。

3.1.2. 表記法

§3.1.1 のような問題がいつまでも継続する理由の1つには、IPA を用いて音価を示すということが近年までされていなかった点を指摘できるだろう。Lorimer (1935-38), Klimov i Edel'man (1970) は活版印刷だったので、フォントの都合などもあったのかも知れないが、近年の欧米での研究 (Berger や Tiffou など) でも IPA で音価を併記しないのは、不誠実ではないだろうか。そのように音価が不明瞭なだけならまだしも、Klimov i Edel'man (1970) 以降、音素を立ててからの表記法も各々が独自に作っているの、さらに混乱を招いている (表1)。

表1 研究者ごとの表記法の異なり

IPA	Lorimer	Klimov i Edel'man	Berger	Tikkanen (1991)	Tiffou	Willson (1999)	Munshi (2006)	Shafi	Yoshioka	Munshi (2019)
ts	ts	c	č	ć	c	ts	c	ć	c	c
tsʰ	ts	ch	čh	ćh	ch	tsh	chʰ	čh	ch	ch
tɕ	č	ć	č	ć	č	ch	ć	ch	č	č
tɕʰ	č	čh	čh	ćh	čh	chh	čh	chh	čh	čh
dʒ	j	ǰ	j	j	j	j	j	j	j	ǰ
tʃ	č	ć	č	ć	č	tʃ	ć	č	č	č
tʃʰ	č	čh	čh	ćh	čh	tʃh	čh	čh	čh	čh
ɕ	š	ś	ś	ś	š	sh	ś	ś	š	ś
ʃ	š	š	š	š	š	sh	š	šh	š	š
ɲ	ɲ	ɲ	ñ	ɲ	ɲ	ng	ɲ	ñ	ɲ	ɲ
ɣ	ɣ	ɣ	ǰ	ɣ	ɣ	gh	ɣ	ǰ	ɣ	ɣ
§3.1.1	ɣ	ǰ	ɣ	ɣ	ɣ	ɣ	ɟ	—	ɣ	ɟ
「良い」	šu.a ~ šu'a	šua	šúa	šúa	šúa	shwa	šua	shōwa	šúa	šua
「I do it」	ečl.ba ~ ečlba	eča ba	éca baa	éca baa	éca baa	échabaa	eča ba	(echaba) ⁹	éčabaa	eča baa
大文字	あり	あり	なし	なし	あり	あり	なし	あり	なし	なし

表記法の流れとしては、ハーチェックなどの装飾記号を用いた①Klimov i Edel'man (1970) ⇒ Tiffou (1999) など ⇒ Yoshioka (2012) などという流れと、②Berger (1974) など ⇒ Tikkanen (1991) などという流れの2つが主流で、Willson (1999) などのような、補助記号を使うよりも複数文字を連ねることで表す (英語重視的な) 表記法は、余り好まれていない。Shafi (2006) なんかは完全にメタル・

⁹ 氏の書記法でフンザ方言を書くとしたらこうなるであろう、という形。西ブルシャスキー語で「I do it」は形が異なり、筆者の表記法で書くとしたら *écam ba* となる。

ウムラウト的であり、説明不十分のその表記法はオリジナリティが強く、実用性や実態を見落としているようですらある（著書名も参考されたい）。表記法という意味では、Burushaski Research Academy (2006)などが用いるのを始めとして、アラビア文字ベースのブルシャスキー文字も何種類かあるが、それぞれの内部で既に体系的でなかったり、母音の表記ルールがあやふやであったりして、どれも実用には向いていない¹⁰。

3.2. 形態論

3.2.1. 語形名称の不統一

研究上、各語族にはそれぞれに独特な用語用法が発達して行く傾向というのがあると思われる。一方で系統的孤立語は、その伝統が構築され難い（相応の人数と時間、或いは天才を要する）と言えるかも知れない。周囲を僅かな語族が包囲しているような孤立語であれば、その語族の伝統に多大な影響を蒙った記述がされて行くかも知れないが、少なくとも周囲を多種多様な語族に囲まれているブルシャスキー語に関しては、記述に用いる用語用法も多元的に入り混じっている感じが否めない。

広く一般的に見られるシンプルそうな機能を専用を持っている語形は、例えば「現在完了」、「属格」など、無難な名称が妥当に使われ、研究者間でのズレが生じ難い。一方で、（特に印欧語に見られないような）馴染みのない機能を持った変化形や、曖昧模糊とした機能を果たしているように見える形態素に対しては、各研究者の知識の下地に合わせる形で分析が異なり、結果が異なって、バラエティ豊かな命名がされてしまう。或いは、機能を想起させない名前を付けて済ませてしまうことすらある。

分析に関しては別の機会に回すこととして、ここでは変化形の名称に関して触れる。表2で、各文法書での各形式の名称を示した。和訳することで各用語の持つニュアンスを消してしまうのを避けるため、ここでは英露独仏の原文のままで示したのを了承されたい。空欄はその形式についての言及がないこと、「（無名）」は形式自体は登場するものの、名称が充てられていないことを意味している。この通り、文法総覧をしている筈でありながら、空欄（記述漏れ）が多く見受けられる。先に §2で Lorimer (1935-38) と Berger (1974, 1998) を推した理由は、この辺りにも垣間見ることができる。

枠線を付けたのは番号付けをして逃れているもの、下線を付したのは形式名（日本語の「テ形」、「ガ格」のような）で述べているものである。後者に関しては、特段の用法解説などがあれば構わない手法かとも思うが、果たしてそれほどの記述がなされているかと言えば、分析できなかったから誤魔化したのではないかと疑える程度しか述べられていないのが実情である。

¹⁰ ただし、そんな書記法を用いて約300ページ分に亘ってクルアーン（コーラン）をブルシャスキー語訳した書籍 (Hunzāi 2007) というものも存在し、大規模資料であるのに判読性が低いことが惜しまれる。

表2 各文法書における動詞 *ét-* 「それをする」の変化形の名称 (定形直説法/定形非直説法/非定形)

	Lorimer	Klimov i Edel'man	Berger	Grune	Tiffou	Munshi	Yoshioka
<i>écam</i>	future	будущее	Futur	future	futur	future	future
<i>éčabáa</i>	present	настоящее	Präsens	present	présent	present habitual	present
<i>éčabáyam</i>	imperfect	прошедшее длительное	Imperfekt	(無名)	imparfait	past habitual	past imperfect
<i>étam</i>	preterite	прошедшее	Präteritum	<u>past II</u>	<u>aoiriste 1</u>	simple past	simple past
<i>étabáa</i>	perfect	перфект	Perfekt	(無名)	parfait		present perfect
<i>étabáyam</i>	pluperfect	преждепрошедшее	Plusquamperfekt	(無名)	plus-que-parfait	past perfect	past perfect
<i>éta</i>			Konativ	<u>past I</u>	<u>aoiriste 2</u>		prospective
<i>étiša</i>	form in <i>-š</i> (injunctive, optative)		<u>š-Optativ</u> ¹¹		(3人称) impératif	optative	optative ¹²
<i>éčamce</i>	conditional	согласительное	Konditional		conditionnel	potential	conditional
<i>étas</i>	infinitive	инфинитив	Infinitiv	noun form	<u>nominal 5</u>	infinitive	infinitive
<i>étum</i>	static participle	<u>герундий I</u>	<u>m-Partizip</u>		<u>nominal 3</u>		perfect participle
<i>écume</i>	present participle	причастие настоящего времени	Präsenspartizip		<u>nominal 1</u>		imperfect participle
<i>éčar</i>	final	(основа настоящего времени с последлогом)	Finalis		<u>nominal 2</u>		finalis
<i>nétan</i>	past participle active	причастие прошедшего времени	Absolutiv	consecutive	<u>nominal 4</u>	participial form	conjunctive participle ¹³
<i>étabáte</i>	(無名)		(無名)				complex converb
<i>étiš</i>	form in <i>-š</i> (injunctive, optative)	герундий II	<u>š-Infinitiv</u>				optative infinitive

3.2.2. d-接頭辞

§3.2.1 では語形の機能分析と命名について見たが、次に見るのは派生接辞の機能分析の問題である。ブルシャスキー語の動詞語幹派生テンプレート (図6) には、屈折要素である人称接頭辞よりも外側に付く、不変化の派生接頭辞 *d-* (図6の [-3] に入る) が存在する。表3では、参考として、*d-* を取らない語幹と取る語幹とで、目的語一致をした場合の変化がどうなるのかを示した。

¹¹ 他に、*m-Optativ* と *áa-Optativ* という形式を認めている。前者は格言などにのみ窺える、極めて頻度の低い形式であり、Yoshioka (2012) では落としている。後者に関しては、Yoshioka (2012) では、命令形 + *-á* として分析している。

¹² 表2の Yoshioka は Yoshioka (2012) の記述であり、2019年現在は、この語形 *étiša* を「接続法」形と考えている。同様に、表の末尾の *étiš* は「接続法不定詞」とする。Berger (1998) の言う *m-Optativ* (実形式としては *étum* となるが、完了分詞とは別物である) を、「希求法」と呼ぶこととした。

¹³ 節連結機能に特化した副動詞形式を「接続分詞 (conjunctive participle)」と呼ぶのは、南アジア言語学の慣習に則ったものである。機能面に注目して言えば、*participle* とするより、*converb* とするほうが妥当だろう。他の研究でこれを *participle* (причастие) としているのも、同様の理由が背景にあるだろう。

-4 否定	-3 完結	-2 人称	-1 使役	0 語根	+1 複数	+2 相	+3 人称	+4 法/助動	+5 人称/条件
----------	----------	----------	----------	---------	----------	---------	----------	------------	-------------

図6 動詞テンプレート (囲み線は語幹) (Yoshioka 2012: 103, 一部改変)

-4: a-/oó-/aú- 否定	+2: -č 未完了
-3: d-完結, n-接続分詞	+3: 一人称
-2: @-/@-/@- 人称(タイプ I/II/III) ¹⁴	+4: -∅ 現在法, -m 非現在法, -ş 希求法 -i/-in 命令法 (SG/PL), 助動コピュラ
-1: s- 使役	+5: 直説法人称, 希求法人称, -ce(q) 反実仮想, -á 念押し
0: 語根	
+1: -ya 複数	

表3 人称接頭辞を持つ d- なし動詞と d- あり動詞の対象活用例

@-ř-	「送る」	d-@-ř-	「送ってくる」
áar-	「私を送る」	dáar-	「私を送ってくる」
góor-	「君を送る」	dukóor-	「君を送ってくる」
éer-	「彼を送る」	déer-	「彼を送ってくる」
móor-	「彼女を送る」	dumóor-	「彼女を送ってくる」

接辞の位置関係に関しては、実際にそういうものであるからと納得すれば良いだけの話であるが、ここで問題として注目したいのは、その接頭辞 *d-* の意味機能である。少し紙幅を取るが、各文法書での（形式ではなく）機能について把握しかねているさまを以下に抜き出して示す。より絞って当たりを付けている研究もあるが、それに関しては Yoshioka (2012) で詳細に検討しているので、本稿では割愛する。

d*-全般に関しては、手持ちのサンプル全てをまとめてその意味や機能を明らかにすることが、どうしてもできなかった。とても重要なことだとは分かっているが、今後の研究で解決されるべき課題を残してしまっている。(Lorimer 1935a: 226)

[機能についての記述なし] (Klimov i Edel'man 1970)

d- 接頭辞の機能は、現代語ではもはや一つに決められるものではない。意味的に異なる *d-* なし形式と *d-* あり形式の動詞対は僅かしかなく、そこから共時的な共通機能を見出すことはできない。(Berger 1974: 32)

¹⁴ 「@」は人称接頭辞のロットを表すのに用いている。人称接頭辞は、譲渡不能名詞の所有主、感情形容詞の感情主、ならびに、一部の他動詞の目的語と一致を果たす。ブルシャスキー語の人称接頭辞には、母音の開き・長さに関連して、3つの異なるタイプがあり、語幹ごとにいずれのタイプの人称接頭辞を用いるかが決まっている。表記上、そのタイプの違いを「@」に後続するハイフンによって区別しており、「@-」がタイプ I、「@:」がタイプ II、「@-」がタイプ III を示す。

一次他動詞に *d*-接頭辞を付加して作られる動詞（人称接頭辞を持たない）は、必ず自動詞である。一次他動詞に付加されて結果としてこれらの自動詞を作るが、*d*-接頭辞の機能は散発的に過ぎない。*d*-の有無で作られる約20の動詞ペアは、意味的に僅かな異なりしか持たないか、全く同じ意味を有している。*d*-接頭辞によるこれらの動詞対が惹き起こす意味変化は、共時的にはっきりと見出せる共通機能というものを少しも示していない。片や、*d*-なし語幹対を持たない他の全ての *d*-動詞について言えば、*d*-は無意味な、拘束的に付加して動詞語幹を作るものでしかない。(Berger 1998a: 110)

d-動詞は過半数が静的（状態を述べる）、或いは受動的な意味合いを持っている。(Grune 1998: 13)

ブルシャスキー語は、*d*-という動詞接頭辞で、しばしば他動詞から自動詞を派生させることができる。ものの分析によれば、その動詞前接辞の根本的な機能は、動詞の表す事行全体から行為者概念を除去することであるらしい。(Tiffou 1999: 171)

d-接頭辞の意味的、形態論的実情は不明である。歴史的に見て重要な、他の動詞では失われてしまった形態論的単位の残存であるかも知れない。(Munshi 2006: 196-97)

先行研究で述べられている機能の中で、受動機能と言われているのは適確ではなく、寧ろ逆役や結果化として理解されるべきであろう。行為者／主語を焦点化する、他動詞化するといった機能【これらはどちらも、Anderson (2007) による】は *d*-接頭辞には合致していない。アスペクト・語彙アスペクト的な観点で言えば、*d*-は動詞語基に完結性を付与しているが、これは中核機能というより副作用であるだろう。(Yoshioka 2012: 280)

どうだろうか。よく分からないと述べているものから、何を述べているのかよく分からないものまで入り混じっているが、いずれにしてもよく分からないのは確かである。

ブルシャスキー語の動詞語幹派生は今では生産力を失っているため、これ以上 *d*-のサンプルが増えることはないだろう。*d*-動詞について、*d*-という要素が内在しているという語構成自体の認識も薄れたのか、*d*-@-*t*「打つ」という動詞が、再分析されて @-*dél*-となっている例も確認されている。今後、解決は可能なのだろうか。

3.3. (形態)統語論

音韻論、形態論という、比較的扱い易そうな分野ですら、各文法書の記述は自由奔放で、その密度や精度には大きなブレがある。その現状は、自戒も込めて、ブルシャスキー語の記述研究は成熟しているとは言えない。見比べたところで、対比がまともに成立しそうな側面という意味ですら選択肢に限りがある。いずれの文法記述においても共通して言えることの一つは、統語論に割かれているページが多くない、ということだ。形態がかなり膠着的で総合性が高く、語順も省略もかなり自在という意味では、自ずと形態論が重視されるのも分かるが、それにしても少ない。「文法書」未満の「文法スケッチ」となると、余計に統語論が蔑ろにされている。

例えばブルシャスキー語の副動詞は、形式上では20種類以上の語形があり、相対時間、指示転換、因果関連付けの有無などで、様々に使い分けをするのだが、過半数の文法記述が副動詞を全

く取り扱っていない。(多くの研究者の母語である) 欧米の言語で貧弱だからであろうか¹⁵。

以下では、数少ない統語論関連の記述の中から、分裂能格性とヴォイスに関してどう書かれているか、いないか、を対比してみることにする。

3.3.1. 分裂能格性

冒頭の概説でも述べたが、ブルシヤスキー語の能格は分裂している。それがどのように分裂しているかについては、これもまた各文法書で意見が分かれている。

他動詞主格・動作主格 (transitive nominative and agential) は、その名詞が、①偶発的な例外を除いた過去語基の時制(過去, 完了, 大過去, 過去分詞, 状態分詞能動)の他動詞の主語である時, ②時制に関わらず動詞 *henas* 「知る」の主語である時, ③他の動詞(特に *senas* 「言う」)の現在語基の時制の場合の主語である時も時折用いられ, ④あらゆる他動詞のあらゆる時制で許可されていて, ⑤状態分詞受動と共に用いられる際には動作主を表していると見做されるであろう。(Lorimer 1935a: 64)¹⁶

能-斜格 (эргативно-косвенный падеж)¹⁷は、独自の標識 *-e* を持っている: *hiles-e* 【少年】, *hayur-e* 【馬】, *den-e* 【年】。その機能は, a) 他動詞の過去時制形において(例: *Behram-e yüljien yecimi* 「バフラムは夢を見た」)だけでなく, *henas* 「知る」と *senas* 「言う」の(或いはその他の全ての動詞でも不規則的に)全ての時制の主語の標示, b) 所有の修飾語標示(例: *Habaš-e padša* 「アビシニア【エチオピア】の王」), b) 間接目的語(例: *hi than-e* 「或る場所に」)やその他の標示である。(Klimov i Edel'man 1970: 41)

1人称単数人称代名詞は、他動詞節であっても未来形と条件形で語尾なし形になる。しかし、ナゲル方言では未来形に能格が用いられ、フンザ方言でも散発的に見受けられる。1人称単数現在では、未来の意志を表す現在形(例: *muú je mámar han cháne waaqíáne máar cága éca baa* 「私はあなたがたに今、事実に基づく話をします」)で *je* 「私」【語尾なし形】が現れる。2人称単数・複数は他動詞未来形で語尾なしも能格形も可能である(例: *un/úne achícuma* 「お前は私に与えるだろう」)が、1人称複数は語尾なしだけである(例: *mi gósan* 「私はお前に言うだろう」)。同じ格配列は条件形にも適用される。(Berger 1998a: 64を要約)

この言語は、「主語」一致の種類として、接尾辞一致の語形で表される能格項と絶対格項とがあるという事実を示す、格標示と一致との分裂を示している。この言語の能格性の面白い点は、地理的周辺の能格性の多くが完了相のみに観察される(先行研究では『分裂能

¹⁵ 副動詞に関しては、目下、Tikkanen (1995) と Yoshioka (2012) を見て頂ければ良いかと思う。二つの記述には用法のズレや出現形式の差があるが、これらよりも詳しく書いている研究は管見の及ぶ限りでは、ない。

¹⁶ Tiffou and Morin (1982) や, Dixon (1994) も恐らく、この Lorimer (1935a) の記述を参照して、ブルシヤスキー語の分裂能格が「過去 vs 非過去」に基づくものと判断している。

¹⁷ Klimov と Edel'man は、能格と属格など、同形の格接尾辞を機能によって別物とは扱っていない。同一形態素の中の、別機能としている。一方で、ヒト女性クラスの名詞の単数形は、特別な属格 *-mo* を持っているとする。格を形から立てるか、(Yoshioka (2012) などのように) 体系から立てるかの違いが反映されている。ここに示されている3つの機能の内、b と b は能-斜格の、「斜格」的な機能ということになるだろう。

格性』と名付けられている) 一方で, この言語の能格は時制・相に関わらず常に標示されていることである。(Munshi 2006: 143)

能格性の消失は, 1人称単数の未来・条件表現(ナゲル方言を除く)と, 2人称単複両方の未来・条件表現に見られる。条件形と未来形は, 未完了接尾辞 *-c* と非現在接尾辞 *-m* の両方を共有している。ここで言う未来表現は未来形と未来の読みの現在形(「(今)~するところだ」)の双方を指す。しかし, 未来の読みの現在形はしばしば能格性を保持するし, 純然たる未来形の場合も能格標識を取ることができるようだ。【どちらを取っても構わない, という条件下では】絶対格主語の場合と能格主語の場合とで, 文に意味的な差はない。(Yoshioka 2012: 247-248を要約)

Lorimer と Klimov & Edel'man はほぼ同じで, 基本的に完了語幹動詞の場合に能格標識が用いられるけど, あらゆる場合に可能性はあると述べている。片や, Berger と筆者もほぼ同じで, 1, 2人称の未来・条件で絶対格主語が現れる可能性が高い, といった主張である。

そんな中, Munshi は分裂能格性を真っ向から否定している。敢えて「地理的周辺¹⁸の分裂能格性」を引き合いに出して否定しているので, もしやスリナガル方言だけ異なっているのかとも思えたのだが, 筆者が2016年8-9月に行った同方言の現地調査では, 他の東ブルシャスキー語との違いが見受けられなかった。Munshi (2019) でも分裂性に関しては一切触れられていない。ブルシャスキー語が *pro-drop* 言語で1, 2人称は代名詞が省略されることが多いとはいえ, ここまで分析が異なると, 研究全体が疑わしくすら見えてくる。

3.3.2. ブルシャスキー語受動の謎

ブルシャスキー語には受動態がない。但し, 他の言語に訳すと主に受動表現となりそうな表現というものはある。「それらを『受動』と呼ぶなら」という括弧付きで, 各文法書が受動を記述しているのかと思うと, 実はそうではないものもある。少し長くなるが, 抜き出してみた。

他動詞の特別な受動活用形というものはないが, 受動的な意味の状態分詞が実動詞や動詞 *mna's* 【「なる」】などと用いられる場合があり, その産物が受動時制と同等と言えるかも知れない (Lorimer 1935a: 238)

[記述なし] (Klimov i Edel'man 1970)

*m-*分詞は補助動詞と共に一種の迂言的完了, つまり大過去を構成する。他動詞の場合にはその補助動詞は明らかに目的語と一致を見せる。したがって, 規則的に受動構文を作ることが可能で, その場合にはいわゆる動作主が能格で表現されることになる(例: *jáa ité kitaap gátánum bilá* 「その本は私に読まれている」)。これを能動として用いることは稀であるが, なくはない(例: *úne yeénum báa* 「お前はもう知っている」)。(Berger 1998a: 168,

¹⁸ ところでこれは, スリナガルの周辺なのだろうか。東ブルシャスキー語の本拠地であるフンザ・ナゲルの周辺なのだろうか。なお, 東ブルシャスキー語に完全に取囲まれているインド語派のドマーキ語は, 人称(3人称 vs 非3人称)でしか分裂しない。

一部例を省略)

幾つかの動詞で、ブルシャスキー語には受動表現がある。これには一定の制約があり、原則的に動作主がヒトではなく、動作の遂行が決断、或いは意図的行為によって惹き起こされてはならない。受動表現は基本的には統語、もしも動詞が取るなら接頭辞と、絶対格標示の名詞に一致する接尾辞によって特徴付けられる。以下の対比は能動文と受動文との異なりを描写するものである：*tíše phária dówaljai* 「風が鴨を飛ばせた」、*tíše phária dówaljaien* 「鴨が風に飛ばされた」。これらの表現が互いに排他的か、同時に使用可能であるかは明らかではない。(Tiffou 1999: 192)

[記述なし] (Munshi 2006)

多くの言語と同様、ブルシャスキー語の完了分詞も受動的な読みを持つ。一方で未完了分詞には能動的な読みしかない。従って完了分詞は時に、コピュラと共に用いられて、一見受動表現っぽい構文を作る(例：*khóle akhí girmínun bilá* 「ここにそう書かれている」)。この構造は行為者主語の節であるとは考えられないが、一方で単純に、頻度が低い、主語が非ヒト／無情物に制限されている、などといった特徴を持つ受動節であると見做すこともできないだろう。目下、完了分詞を以下のような修飾語として捉え、次のように再建される存在文からちょっと省略されているだけの、単なるコピュラ述語節だと捉えるべきだろう(*khóle akhí girmínun jumláan bilá* 「ここにそう書かれた一文がある」)。(Yoshioka 2012: 90-91)

[記述なし] (Munshi 2019)

Lorimer が言っていること、Berger が言っていること、筆者が言っていることは、細かな表現の差こそあれ、概ね同じであるだろう。詰まり、完了分詞とコピュラなどの組み合わせで、「VされたXがある」⇒「XがVされた」という読みができるだろう、ということである。

それと、Tiffou が示している西ブルシャスキー語の能動・受動の対立とは、全くの別物である。Tiffou の言っているものは、能格項の行為者、絶対格項の受動者はそのままで、動詞の主語標識である人称接尾辞だけを取り替えることで、ヴォイスの変換が可能であるという主張である。もしもこれが事実であったならば、動詞の自他の対立が崩れるし、格の名称もまた異なったものになるであろうし、そのような文法構造が実際にあるのだろうか、2007年に西ブルシャスキー語の調査を行ったのだが、後者の例はどのインフォーマントに聞いても非文と判断された。東ブルシャスキー語でも並行的な例を作文してみたが、結果は同じであった。そもそも、能動文と受動文との違いはこうであると断言した次の文(互いに排他的か否か～)が、既に意味不明である。引用した部分以降も更に、対比した例文の解説が続いているのだが、いずれにしても正しい記述ではなさそうである。

3.4. 語彙集

文法記述そのものではないが、幾つかの文法書には、語彙集が付いている。単品で辞書として出版されている Burushaski Research Academy (2006, 2009, 2014) や、Willson (1999) などもあるが、

幾つか問題点がある。

主要な問題点は、人称接頭辞の扱い。ブルシャスキー語の名詞の一部、形容詞の一部、動詞の一部は、人称接頭辞を必要とする。その人称接頭辞は品詞を超えて共通しているものなのだが、動詞における結合価などとの絡みで、母音の開き・長さによる3つのタイプが存在する。それらの異なりを示しつつ、語彙集の中でどう示すかが1つの悩みどころとなっている。上に挙げた2つや Shafi (2006) などは、3人称単数ヒト男性クラスで一致させた形式で示しているが、そのクラスでは形態音韻論的に他の人称・クラスの語形と大幅に形が変わる語があることや、中動化するのを見たと見ればその形で人称接頭辞が固定化されている動詞語幹というものもあり、厄介である。一方で、言語学的教育を経て来た研究者たちは、人称接頭辞を空所にして示しているのだが、示しかたが抽象的で、慣れるまでに時間が掛かるかも知れない。人称接頭辞のタイプの異なりの示しかたも、研究者によって多様である（誰一人同じではない）。

更に、人称接頭辞とも絡む問題ではあるが、見出し語をアルファベット順に並べる場合に、関連性の高い動詞語幹が散り散りになってしまう問題もある。同一語根から派生されている語幹であっても、派生接頭辞が付いているとそれだけで分散するし、派生の過程で無声化、無気化、閉鎖音化なども起こるため、互いに遠く離れてしまう。Berger (1974, 1998) や Yoshioka (2012) は語根で集約する手を使っているが、結局そうすると実現形語幹の見出し位置からも案内を出さなければならぬし（辞書を引く側としては二度手間になるし、紙幅も嵩む）、形態音韻的变化を逆算してどういう形式を語根として再建するかが、別の問題を生み出す。

思い付いた活用形を別の見出し語として並べているように見える Burushaski Research Academy (2006-14) の論外さを看過しても、借用語の意図的な排除、品詞情報、屈折形情報などなど、文法の問題と関連したりしなかったりしつつ、やはり語彙集の問題は尽きない。

謝辞

本研究は科学研究費補助金 JK15H05380 の助成を受けたものである。また、本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- Anderson, Gregory D. S. 2007. "Burushaski Morphology." *Morphologies of Asia and Africa* (Alan S. Kaye, ed.), 1233-1275, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Backstrom, Peter C. 1992. "Burushaski." *Languages of Northern Areas* (Peter C. Backstrom and Carla F. Radloff, eds.), 31-54, Islamabad: National Institute of Pakistani Studies Quaid-i-Azam University, and Summer Institute of Linguistics.
- Burushaski Research Academy, ed. 2006-2014. *Burūshaskī-Urdū Lughat: Jilde 1 [Alif tā Ğ] (الف تا خ)* (بروشسکی - اردو لغت، جلد اول [الف تا خ]) (2006); *Jilde 2 [D tā Gh] (د تا غ)* (جلد دوم [د تا غ]) (2009); *Jilde 3 [F tā Y] (ف تا ی)* (جلد سوم [ف تا ی]) (2014). Karachi: University of Karachi.
- Čašule, Ilija. 2010. *Burushaski as an Indo-European "Kentum" Language* (Languages of the World 38.) München: Lincom Europa.
- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hunzāi, Ghulām ud-Dīn Ghulām. 2007. *al-Qur'ān al-Karīm: Burūshaskī Tarjūmah* (القرآن الكريم: بروشسکی ترجمہ). Gilgit: Oxford Gilgit Printers, Gilgit Kashmir Printers.
- Lorimer, D. L. R. 1939. *The Dumāki Language. Outlines of the Speech of the Doma, or Bērīcho, of Hunza*. (Publications de la Commission d'Enquête Linguistique IV.) Nijmegen: Dekker & van de Vegt N. V.

- 縄田鉄男 1992 「ブルシャスキー語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典 第3巻』, 845-850, 東京：三省堂.
- Tiffou, Étienne and Yves-Charles Morin. 1982. "A Note on Split Ergativity in Burushaski." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 45/1: 88-94.
- Tikkanen, Bertil. 1991. "A Burushaski Folktale, Transcribed and Translated: the Frog as a Bride, or, the Three Princes and the Fairy Princess Salaasir." *Studia Orientalia* 67: 65-125.
- . 1995. "Burushaski Converbs in their South and Central Asian Areal Context." Martin Haspelmath and Ekkehard König, eds. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective. Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms —Adverbial Participles, Gerunds—*, 487-527, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Willson, Stephen R. 1999. *Basic Burushaski Vocabulary*. Islamabad: National Institute of Pakistan Studies Quaid-i-Azam University, and Summer Institute of Linguistics.